

水辺の楽校つまりっ子ひろばの昆虫

つまりっ子ひろばのミヤマシジミ

この種は、ユーラシア大陸北部から北アメリカに分布しています。日本では宮城・山形県南部から新潟・長野・静岡県までの本州中部に産地が知られています。しかし、近年産地は激減し、個体数も少なくなりました。環境省と新潟県は、「絶滅危惧Ⅱ類」に指定し、種の保全を指示しました(2001年)。

ミヤマシジミの後羽の縁に見られる黒紋列はいろいろのタイプ(型)に分けることができますが、「つまりっ子ひろば」のものは、丸い黒紋の先端部を白鱗が囲むタイプ(27.5%)、黒紋が縁から離れるタイプ(33%)、黒紋が縁の黒帯に接着する基本型(11%)、黒紋が移行的に衰えながら消失するタイプ(28.5%)の4型です。このような各タイプが高率に現れる個体群は、我が国ではほかに見られないと思います。

このように特異な個体群であることが明らかになりましたが、今後、時間経過とともにこの比率がどのように変化するのか、大変注目されます。



コマツナギの蜜を吸う
ミヤマシジミ(6月~8月)



a 黒紋は白鱗で囲まれる
b 黒紋が縁の黒帯から離れる
c 黒紋が黒帯に接着する
d 黒紋は退化的に変化する

ミヤマシジミ(♂)後羽表外縁の黒紋

図 No	採集地 標本数(♂)	糸魚川市	柏崎市	十日町市	塩沢町	六日町	会津若松市
		堀川大橋	荒浜松林	十日町橋	登川	坪池橋	古城橋 阿賀川
a) 白鱗型	18	8	91	29	4	33	66
		4 (50)	25 (27.5)	1 (3.4)			2 (3.0)
b) 黒紋離れ型	3	4	30	3		6	5
		(16.7)	(50)	(33)	(10.4)	(18.2)	(7.6)
c) 黒紋接着型	2		10	14	3	13	45
		(11.1)	(11)	(48.3)	(75)	(39.4)	(68.2)
d) 黒紋移行型	13		26	11	1	14	14
		(72.2)	(28.5)	(37.9)	(25)	(42.4)	(21.2)

()は出現率 %

つまりっ子ひろばのミヤマシジミ(4型)
成虫は年3回(6月、7~8月、9~10月)出現する。



幼虫が食べるコマツナギ(花期:6月~8月)

水辺の楽校で確認された昆虫

採集年月日: 2005年9月23日
採集場所: つまりっ子ひろば

採集された昆虫	カマキリ類		ハサミムシ類					コウチュウ類																										
	トンボ類		バッタ類					チョウ類																										
オニヤンマ	(2)		オオカマキリ	マダララス	エンマコオロキ	サトクダマキモトキ	ツユムシ	オナガササキリ	クサキリ	ウマオイ	オンフバッタ	シヨウリョウバッタ	ハネナガフキバッタ	クルマバッタ	トノサマバッタ	クルマバッタモドキ	コバネイナゴ	ヒシバッタ	オオハサミムシ	コマタラカミキリ	キアゲハ	ナミアゲハ	モンキチョウ	モンキチョウ	キチヨウ	モンシロチョウ	ツバメシジミ	ミヤマシジミ	ベニシジミ					
採集数	(2)	(2)	(11)	(10)	(1)	(8)	(3)	(1)	(13)	(6)	(1)	(12)	(5)	(4)	(1)	(8)	(18)	(2)	(7)	(10)	(21)	(2)	(1)	(1)	(1)	(2)	(1)	(1)	(2)	(4)	(5)	(2)	(1)	(1)

信濃川 水辺の楽校つまりっ子ひろばの昆虫

信濃川の植物



コニワハンミョウ (ハンミョウ科)
川原を好んですむハンミョウ。6月下旬ごろから見られる。幼虫はココロギなどの小さな昆虫を食べる。体長約10mm。



ノコギリクワガタ (クワガタムシ科)
幼虫はナラやヤナギにトンネルをつくって生活し、翌年の6月ごろから成虫になって出てくる。個体数は仲間のクワガタやスジクワガタより少ない。



コクワガタ (クワガタムシ科)
ほかのクワガタムシ類と同じく樹液に集まる。クワガタは大きなや、ひん弱なのまでいろいろあって、スジクワガタと区別が難しい。(赤い星があるのはケシキスイ科のヨツボシケシキスイ)

信濃川の昆虫



マメコガネ (コガネムシ科)
成虫はマメ科植物を好んで食べる。6月～9月ごろまで見ることが出来る。1枚の葉に5～6匹集まっていることもある。体長は約7mmで大豆ほどの大きさ。



ベニシジミ (シジミチョウ科)
幼虫はスイバを食べる。成虫は5、7、10月に現れる。春のチョウは写真のようにあざやかだが、夏や秋のチョウは黒っぽい。



ツバメシジミ (シジミチョウ科)
幼虫はシロツメクサ(クローバ)、コマツナギ、クサフジなどのマメ科植物を食べ、成虫は年3回、春、夏、秋に現れる。

信濃川の水生物



ルリシジミ (シジミチョウ科)
羽の表はるり色、裏面の黒い小紋の色が淡いことなどが特徴。幼虫はクララ、ハリエンジュ、クサフジなどマメ科植物を食べる。



ヤマトシジミ (シジミチョウ科)
南方系種のため、北海道では見られない。幼虫の食草はカタバミ。成虫は春、夏、秋に現れるが、秋には大変多くなる。



キアゲハ (アゲハチョウ科)
幼虫は2本の臭い角を出して外敵を近づけない。セリ、ミツバなどセリ科植物を好んで食べる。成虫は春、夏、秋に現れるが、飛び力が大きく、行動がすばやい。

信濃川の野鳥



モンキチョウ (シロチョウ科)
幼虫の食草はコマツナギやシロツメクサなどのマメ科植物。成虫は6、8、10月の年3回現れる。この種は成虫で冬を越し、春早く現れて産卵する。



キチョウ (シロチョウ科)
幼虫の食草はメドハギ、ヤマハギなどのマメ科植物。春早く現れる個体は成虫で冬を越したもの。秋おそく羽化する個体は、羽の縁にある黒紋のないのが多い。



キタテハ (タテハチョウ科)
幼虫はタデ科植物のカナムグラを好んで食べる。成虫は6～7月と9～10月の年2回現れる。秋に現れるタイプは羽のギザギザが深く、色が濃い。

信濃川の生き物

信濃川の石

**ノシメトンボ** (トンボ科)

成虫は6~11月まで飛んでいる。南方系種で、中魚沼地方では1950年までは見られなかった。羽の先端に黒い部分があるのが特徴。

**ミヤマアカネ** (トンボ科)

水のきれいな小川にすみ、成虫は発生地からあまり離れない。「つまりっ子ひろば」に飛んでいるミヤマアカネはどこからきたのか。

**アキアカネ** (トンボ科)

幼虫は水深の浅い池や湿田にすむ。成虫は6~7月に羽化すると高い山に移動し、お盆すぎから山を下りはじめ、十五夜前後から平野部に広がる。

**キリギリス** (キリギリス科)

「つまりっ子ひろば」にはたいへん多い。成虫は7~9月に現れ、「チョン・ギース、チョン・ギース」と、にぎやかに鳴く。写真はめず。

**トノサマバッタ** (バッタ科)

クルマバッタによく似ているが、後羽を開いてみると淡黄色で、紋がないことから簡単に区別できる。「つまりっ子ひろば」では多く見られる。

**クルマバッタ** (バッタ科)

後羽にある幅広い黒帯が一番の特徴で、よく似ているトノサマバッタと区別される。大きさは大小さまざまである。「つまりっ子ひろば」では近年少なくなったが、魚野川の河川敷には多いようである。

**クルマバッタモドキ** (バッタ科)

「つまりっ子ひろば」で一番多いバッタ。雄にはずいぶん小さいのもいる。後羽はクルマバッタに似ているが、胸部に白いX(エックス)字紋がある。

**オンブバッタ** (バッタ科)

ショウリョウバッタのように足が発達した種とは違い、足は短く飛ぶ力が小さい。めずしいつも小さい雄をおんぶしている。

**オオカマキリ** (カマキリ科)

写真は卵を産んでいるところ。この丸くふくらんだ卵のうのなかに卵が数十個入っている。この種の特徴は後羽が紫色であること。よく似たチョウセンカマキリの後羽は淡い黄色で、その卵のうは少し小さく細長い。

**コカマキリ** (カマキリ科)

オオカマキリより小さい。体全部が茶色なので目立たないが、前足のひざの内側に濃い紫色の紋がある。まれに体全部が緑色の個体が見つかることもある。

**セイヨウミツバチ** (ミツバチ科)

ヨーロッパから蜜を取るために持ち込まれた種。日本固有のニホンミツバチは黒味が強く、巣はなかなか見つからない。

**クマバチ** (ミツバチ科)

大形種で春早くから活動を始める。生活史はまだよく分かっていない。雄とめすの一組みで生活し、集団にはならないようである。